

保健所は黒田家菩提寺跡

城郭研究室、保健所に移転中

平成2年(1990)4月に開館した日本城郭研究センターも、今年で30年になります。それを“記念”してなのか施設を改修することになり、工事中、城郭研究室は姫路市保健所(写真1)に仮移転しました。空き部屋を借用しているため、資料はほとんど持ち込むことができず、利用者には不便をおかけしています。



写真1

保健所は、市内坂田町にあります。実はこの保健所、平成7年以前は日本城郭研究センターの南に隣接していました。事務に通曉した所員がいて、わからないことがあると教えてもらうこと多々。それから25年が経ちましたが、またもやお世話になってしまいました。

保健所の位置する坂田町は、旧城下町の時代から続く町名です。中曲輪の東部には寺町が南北に細長く配置されました。その寺町も西国街道と一丁町を境に北半を上寺町、南半を下寺町(しもてらまち)といい、下寺町とは道を挟んで西側に位置したのが坂田町でした(図1)。近代になると下寺町は坂田町に併合され、下寺町の東側の通称「下寺裏町」が、改めて下寺町となりました(橋本政次『姫路市町名字考』姫路市役所、1956)。つまり、保健所は旧城下町では下寺町に位置し、当然、かつて寺があった場所に建てられています。黒川紀章デザインの保健所建物にそんな歴史は感じられませんが、敷地の端の石碑に、ここが心光寺(しんこうじ)の境内であった微かな記憶が刻まれています(写真2)。



写真2

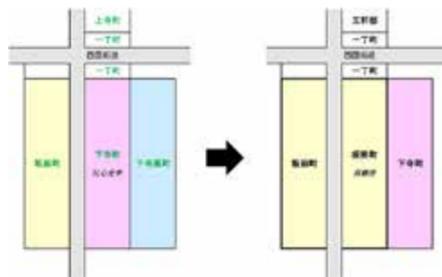


図1

心光寺は、平成26年放映の大河ドラマ「軍師官兵衛」で少し紹介されました。もともと黒田家の菩提寺で、御着城(ごちゃくじょう)に近い佐土(さつち 市内別所町)にありました。池田輝政の城下町整備に伴い、下寺町に移転した由緒を持ちます。御着城跡にある黒田家墓所の整備について、福岡藩と御着村とのやりとりの窓口になったのはそうした歴史的経緯によるものでした(「寛政五年書留帳」「筑州様当御廟所御法事一件」、『城郭研究室年報』vol.23、2014)。



写真3

ところで、平成18年5月23日付読売新聞に「姫路捕虜収容新たに5寺」という記事が掲載されました。日露戦争時、姫路に設置された露軍捕虜の収容所が既知の6ヶ所以外に、新たに5ヶ所が市民らによって確認されたというのです。その6ヶ所とは『姫路市史第5巻上』(以下、『市史』)に拠ったとありますが、『市史』の記事から6ヶ所を確認することはできません。おそらく捕虜の収容先として挙げられた「車門付近の収容所」「船場本徳寺支所」「亀山本徳

寺支所」「景福寺支所」「惣社の射楯兵主神社」「坂田町の寺院」をそれぞれ1ヶ所として数えたのでしょう(573～574頁)。記事の要点は、「坂田町の寺院」の内訳の5ヶ所が判明し、同時に『市史』掲載の写真が正法寺ではなく善道寺の誤りであることが明らかになったということでした。ただ、些細なことですが、妙行寺の捕虜の写真は既に知られていた(写真3)、正確には5ヶ所ではなく4ヶ所となります。いずれにせよ「坂田町の寺院」とは、妙行寺、善道寺、心光寺、正法寺、願入寺、妙円寺であることが明らかになりました。

さて、写真4は心光寺で撮影された捕虜たちです。本堂の扁額に「實貞山」とあるのが読めます。これは心光寺の山号で、現在、北平野台町に移転した心光寺の門にも「實貞山」の扁額が掛けられています(写真5)。

心光寺にいた捕虜の数は把握できていませんが、明治38年(1905)1月に受け入れた捕虜は、景福寺に300人、亀山本徳寺に400人、船場本徳寺に500人を収容しています(『市史』)。姫路全体では約2,200人が収容され、その数は明治38年当時の姫路市の人口35,000人の約6%に相当します。坂田町の道に整列した露軍捕虜(写真6)の様子を見てもわかるように、そのほとんどが集中した旧城下町近辺では、捕虜の存在感は大きかったことでしょう。

このほか、市中で買い物をする捕虜を撮影した写真もあり(写真7)、自由な行動が許されていたことが窺えます。しかし、「捕虜は悠々、市民は悄悄」と皮肉られたように、こうした自由さは次第に彼らの一部を増長させることにもなりましたが、それでも人道的な心情で接していました(小沢健志編『写真 日露戦争』筑摩書房、2010)。

それから40年後、立場が逆転し敗軍となった日本兵や日本人非戦闘員に対するシベリアや満州でのソ連軍の非情さを想起すると、小沢健志氏が言うように複雑な思いになります(小沢前掲書)。

※緑字は、近世の町名

※写真4、6、7は北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター図書室所蔵



写真4



写真5



写真6



写真7